

2024年8月15日

第33回 オリンピック競技大会 2024パリ大会 水泳競技全体総括

まずは東京五輪以降、三年間の弛まぬ努力と五輪日本代表として水泳ニッポンを背負って全力で戦い続けてきた全ての選手に心からの敬意を表する。

水泳5種別（競泳、飛込、水球、AS、OWS）とも、各目標に対しての結果は明暗を分け、選手・コーチの思いは様々であるとは思いますが、今回獲得された銀メダル二つは、競泳18歳の松下知之選手、飛込17歳の玉井陸斗選手と若手選手の台頭があり、次の2028ロス五輪に向けても希望の持てる成果であった。

水泳の競技結果については、既に報道でも諸説展開されているが、ここ20年来メダル常勝種目であった競泳、ASが苦戦した一方で、飛込が約100年越しで初の五輪メダルを獲得し、強豪中国の牙城を崩す勢いであった事。水球は決勝リーグにこそ届かなかったものの強豪国に劣らぬ試合内容が多く、世界で戦うチームとしての顕著な実力向上が見られた事。そしてOWSも、女子10kmでは序盤から上位をキープし、ラスト60mのコース取り判断ミスで惜しくも入賞は逃したものの、五輪入賞の可能性を大きく躍進させた事。こうした結果を受け、各種別の強化事業が着実に成果を結んでいる一面も大きく評価したい。

今回苦戦を強いられた競泳について補足すると、金メダルを含む複数メダルの獲得目標には及ばなかったが、リレーを含めれば16名、約6割の選手が決勝レースを泳ぐ事ができた。五輪決勝という世界最高峰レースの大歓声を受け、まさに「オリンピック」という雰囲気の中で泳げたことは、何にも代え難い経験と価値であると思う。

さらに、大ベテランの鈴木聡美選手の200m平泳4位入賞と女子メドレーリレー100m平泳ベストタイム（未公認）更新は、競泳選手の可能性と展望を大きく広げたとし、初出場の高橋生含む若手選手たちの入賞は2028ロサンゼルス五輪につながる成果である。

今回の課題は、3月選考会タイムを超えられなかった種目が多数あった事である。選考会後4ヶ月間の日本代表合宿を経て、選手の競技力が低下する事は考えられない。では何が足りなかったのか、今後の強化事業を組み立てる上でこの事の検証は必須である。

また、ASについてはチーム5位、デュエット8位と入賞は果たしたものの、選手たちはメダルを逃した悔しさはあると思う。昨年のAS採点ルールの変更から約一年、今回五輪のメダル獲得国には旧ルール下での序列を崩すかたちでイギリス、オランダ、アメリカが加わり、AS競技に求められる要素が大きく変わってきたことを物語る。新ルールに基づいた戦略・強化対策に苦心しながらも最大努力を重ね、五輪の舞台で正々堂々と演技を披露し泳ぎ切ったマーメイドJAPANには心からの賛辞を贈る。

ここを新たなスタートとして、従来の日本ASチームの強みを活かしつつ、新基準での戦

いに必要な要素をさらに向上させるべく、チャレンジ精神をもって強化にあたってもらいたい。

結びに、選手団強化現場において尽力頂いた総監督以下、監督、コーチ、ドクター、トレーナー、スタッフ各位に心からの慰労と感謝を申し上げる。

パリ五輪水泳選手団団長 金子日出澄